

自然から学ぶ自分の頭で考える



前野良沢について語る川島真人さん

前野良沢を語る

中津藩を研究 川島真人さん

「良沢は『解体新書』の翻訳で中心的な役割を果たしている。だが、杉田玄白らと一緒に翻訳者として紹介されておらず、後世への知名度も玄白よりも低い。業績をどのように評価するか。」

「東京大名醫教授で元日本医史学会理事長の故小川鼎三(杵築市出身)が解体新書を『真の意味で蘭学の幕開けであり、日本の科学史はここに始まった』と称したように、日本の科学史において良沢の成し遂げ

たことは非常に大きい」

「解体新書に名前を記さなかったことは、①完璧主義者の良沢が翻訳に納得していなかった②名を売ろうとする多利を求めなかった③という説があるが、当時の江戸幕府は鎖国政策の下、海外の情報や書物を紹介した作家などには厳しく対処していた。発禁処分などになったときに最大の功績者である良沢を守ろうとして、あえて外したのではないかと私は考えている」

「良沢に関しての著作は少なく人物像は分からないことが多い。どのような人物と

人がしないこと追究

考えるか。

「生涯で30冊近くの蘭書を翻訳したが、医学書は2割程度で残りは天文学や数学、歴史など。そこから得た情報により当時では指折りの知識人だっただろう。人情にも厚かったようで魅力的な人物だったと思われる。なぜ蘭学の道に進んだのかははっきり分からないが、幼少期に育てられたおじの淀藩医、宮田全沢の教えである『人がしないことを究める』ことを実現しようとし、知的好奇心が刺激される蘭学の道を目指したのだろう」

「良沢を生み出した中津藩は明治時代に西洋学問を広めた福沢諭吉らも輩出している。中津藩から時代を先取る人材が出てくるのはなぜか。」

「中津藩を治めていた奥平家の先進的な考え方があったことが大きな要因といえる。そこに自然との調和を重んじる老荘思想の影響が重なり、西洋の知識を取り入れるものだったといえる」

ながら、自然への謙虚さを持ち合わせた日本独自の哲学を生み出した」

「藩医ながら全く患者を診ない良沢を優遇することに対し、不満の声を聞いた中津藩の3代藩主・奥平昌鹿は『彼は和蘭(オランダ)の化け物だ』と述べ、良沢の活動を理解し、支援した。日本は出る杭を打つ傾向があるが、飛び抜けた良沢という杭をそのままにして、さらに育て上げた中津藩の懐の広さを感じる。人を育てるのは以上に立つ者の度量も大切なのだろう」

「良沢の生涯から感じる現代へのメッセージは、

「良沢は自然から学ぶことを大切にすることを打ち立てて活動をしていた。その信念を貫き、日本に西洋の実証主義を伝え、科学の時代の礎を築いた。この考えは、混沌とした現代を切り開く人材にこそ求められ

前野良沢年表

1723年	福岡藩士谷口新介の子として江戸で生まれたとされる
29	父が亡くなり、おじの宮田全沢に育てられる
48	前野家を継ぎ、中津藩医になる
69	中津藩主奥平昌鹿の参勤交代に従い、中津城下町に。長崎へ旅に出る。オランダ大通詞・吉雄耕牛に学ぶ
70	長崎で「ターヘル・アナトミア」を手に入れる
71	杉田玄白らと人体解剖に立ち会い、「ターヘル・アナトミア」の翻訳に着手する
74	「解体新書」を出版する
80	大槻玄沢が良沢の下でオランダ語を学び始める。昌鹿が亡くなる
88	玄沢が良沢のオランダ語の研究成果を紹介した「蘭学階梯」を出版する
1803	江戸で亡くなったとされる。80歳
69	玄白が良沢の功績を記した「蘭学事始」を、福沢諭吉らが出版する